
脇役主人公から見た彼ら

笑えばいいと思うよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役主人公から見た彼ら

【Zコード】

N1650S

【作者名】

笑えばいいと思つよ

【あらすじ】

主人公が美少女達に囲まれて青春を過ぎ」します。

嘘です。

始まり（前書き）

初めての「ハグ」メモです。
駄文ですが、よろしくお願いします。

始まり

いきなりですが、今俺はと~~~~~つても機嫌が悪いです。えつ何故つて？それは、海より深~~~~いわけがある。…………すいません、嘘です。ただの僻みです。

だって普通、学校に登校してくる時に美少女一人とイチャイチャするヤツがいますか？いいえ、いません。多分、…………いないと信じたい。という事でヤツに襲撃することにしましょう。

「準備はいいか、お前ら！」

『おお~~~~!..』

何処からか、いきなり現れた謎の軍団。…………いや町正しう、モテない奴らだ。

「よし、突撃だ!!」

俺が合図を出すと、モテない軍団は一斉にアイツに向かって行った。

………いいで、俺の自己紹介でもしちゃう。名前は高橋 昌哉!!でも間

る普通の高校生だ。つと自己紹介している内にモテない軍団は倒されていった。俺？俺は、行かないよだつてアイツ有り得ない程の身体能力あるから、わざわざ倒されるの分かつてるのに挑まないし、それに俺、もやしつ子だし（笑 そろそろアイツに声かけるか

「よつ、朝から大変だな。」

「おい、何が「よつ朝から大変だな。」だよ、これ全部お前の仕業だよな？」

今俺が、声かけた奴、それがスーパーイケメンボーイこと木村 悠司 何でも完璧にこなし、性格も完璧、そして、鈍感。どこぞの主人公みたいにモテるヤツだ。

「それって本当なの？」

「本当だつた許さないよ」

今俺に話しかけてきた奴らは、東山 奈央と中谷 美奈だ。何故悠司に惚れているかというと、ナンパされている所を助けられてみたいな感じだ。

「よく聞いてくれ、東山さん、中谷さん。」

「西山だよ。」

あれ？ 西山だっけ、どうちでもいいじゃん。

「とにかく聞いてくれ、悠司が襲われている時は、必ず君達を守るはずだ、それに…」

俺は、一人に近付きボソッと言った。

「怖いとか言って抱きつくな事だつて出来るチャンスがあるじゃん。しかも、悠司が闘ってる姿見えるし」

二人はしばらく考えて

『うん、じゃあ良こよ。』

「やうだ、もっと言つてやれ… つて、ええ~~~~~！？」

何許しあがつてんの？ さつきまで、怒つてくれてたじゃん。』

何故か急に悠司が騒だした。

「じゃあ、俺先に学校行くから。」

悠司達に手を振りながら、俺は、学校へ向かった。

学校に着き、自分のクラスに入つて、席に座るときなり悠司よりは劣るが、かなりのイケメンが話かけてきた。

「相変わらずだよなあ～自分は動かないで他の人を使って襲うなんて。」

「そんなに褒めるなよ、照れるだる。」

「いやいやいや、褒めてないし、どちらかと言えば恥じてるから。」

そうだったのか…俺は褒められたと思ったんだが。……ここで、今俺と話をしているイケメンは、藤森 大地。陸上部のエースらしい。

「やつやつ、俺が追わせた女子達はどうだった?」

すると大地は、やはりお前かみたいな目で見てきた。

「やっぱり、マサだつたんだな！あれ結構、怖かつたんだぞ……こつちは全力で走つてゐるのに、ピッタリつと付いてくるし……」

思い出したのか、顔が真つ青になつていた。確かに怖いよな、陸上部のエースが全力で走つてゐるのに、付いてくるのは……すげえな恋する女子の力は、

卷之三

おや、リア充こと悠司が爽やかに登場してきた。しかもクラスの女子達の大半の目がハートになつてゐるし……リア充なんて氏ねばいのに。てか氏ね。

「死ね～～～～～～～ 悠司！！」

等と思つてゐると、1人変態が悠司に殴りかかつた。しかし、悠司にカウンターを喰らい一発Ｋ・Ｏ・した。俺は、変態もとい亮輔に近付いた。コイツの名前は、飯塚 亮輔、……とにかく変態だ。

「おい！ 大丈夫かあ？」

亮輔の顔を叩きながら聞いた。

意識が戻ったのか、俺に向かつて答えた。

「チツ 無事なのかよ。」

「え？、心配してくれたんじゃあないの？」「かいつまで呂こてるんだよー。」

「ん？ あつ悪い悪い、 しつかしお前もよく懲りないよなあ」

「男にはやらなければならキーンコーンカーン……」

亮輔が喋つてゐる最中にチャイムが彼の様に鳴つた。すぐに担任がやつて来てホームルームが始まつた。

時間が経ち今は昼休みだ。

「ねえ、悠司一緒に昼食食べようよ」

中谷さんが悠司を誘っていた。

「違うよ、悠司は私と食べるのー」

対抗して、東山さんでいいんだっけ?が悠司の左腕に抱きついて、中谷さん向かって言っていた。すると中谷さんも右腕に抱きついて、ギヤー、ギヤー言っていた。ちなみに悠司は困惑した表情している。

クラスの男子達は震えながら『リア充死ね!』と襲おうとしていた。俺はとめにはいった。

「待て、お前達。」

するとクラスの男子達は「とめないでくれ

「待て、お前達。」

「お前はヤツの味方なのか」

「違う、このままでは負けてしまう。だから、筆箱の中からコンパス、ハサミなどを使って攻撃するんだー！」

俺は無駄に熱弁をした。悠司は俺の発言を聞き「マジかよ」と言いつぶつと逃げて行った。

「隊長、ヤツが逃げました。」

いつの間にか、隊長になつてゐるし

「絶対に、ヤツに對して一人で挑むなー複数で攻撃をしろ。」

『はい』

何処の軍隊だよ… そうだ、亮輔がいなかつたな 俺の記憶が正しければ、放課後、屋上で告白してる筈だけど。何故わかるかつて? だってアイツ、悠司達がイチャイチャしていた時に、俺も彼女作つてやるとか言つてどつか行つたからね。これは行くしかないね。

「出来れば、告白してる時に入りたいな。」

まあそんなに上手くいかないよな、やつ思い屋上の扉を開けた。

「「」あんなせい。」

開けた瞬間に拒否られたし……なんて思つてると、亮輔らしいヤツが泣きながら、走つていなくなつた。さて、亮輔が告白した人で見るか。

「あっ、まゆまゆじゃあ、あ～つませんか？」

「まゆまゆ言つなーてか、豈哉は何の用なの？」

屋上に居たのは、通称まゆまゆ（まあ俺しか呼ばないけど）！
相澤 真由。結構な美少女

「告白がもよ。」

まゆまゆは、すぐに反応してきた。

「ないないない、アンタが昔曰いてきたら、ここから飛び降りるわ。

」

「マジで、好きだー。はい飛び降りて」

まゆまゆは、疲れた様に溜め息混じりに

「…完全に飛び降りる」とを、楽しみにしてるよな。」

つと書つた。俺が、帰ろうと廊上を出ようとするとまゆまゆが話かけてきた。

「ねえ久しぶりに一緒に帰らない?」

と恥ずかしがりながら、つーか中学の時も数えるぐらいしか一緒に帰宅していないし、

「じゃあ、鞄取つて」よつぜ。」

その後、教室に鞄取つて下校した。

イケメンって氏ねばいのこ

何かを、理由はないけどさ

「妹が欲しかつたな」

「何兄貴言つてるんだよ！？しかも実の弟が居る田の前で……」

今、俺の前で騒いでいる奴こそ 高橋 陽斗 通称ハル。歳は1つ
違いで、何故か俺と同じ学校に進学してきやがつた。しかもイケメン
ときた、両親は普通だ……いや、母親は違うか。とにかく何で
兄の俺が普通で弟がイケメンなんだ。

「ただ、弟より妹の方がよかつたと思つていただけだ。」

「それ弟の前で言いますか！普通。それに弟の方が良いことがある
じやん。」

「ほう、言つてみろ」

「えつ…………氣を使わなくて済む。」

「家族つて、そうじやあない。」

「後…………そつー一緒にゲーム出来る。」

「別に妹でも出来るじやん。」

「うう……」

勝つたぜ、何に勝ったのかよく分からないが、やっぱり弟をこじるのには、おもろしき。

「ねえ、兄貴話変わるけど好きな人出来た?」

ハルがいきなり質問してきた。しかも俺に恋の話、今まで全くしなかつたのに、はつ……これはまさか

「何だ、好きな奴でも出来たか?」

まつ つっても毎回聞いてもいなって言つてるし、違うか……これで次の日に彼女を連れてきたら、マジで怒りますね、てか埋める。「それが……何て言つか……田惚れ……かな、多分先輩だと思うだけ。」

「どんな感じだ?」

「えつ、無理絶対教えない!。」

コイツ何を勘違いしてるんだ? あ~俺が邪魔すると思つてるのか、人の恋を邪魔するほど馬鹿じや あないし多分。

「何勘違いしてるんだ? 俺は情報を教えてやるつて言つてるんだぞ、知つてる奴ならな。」

「 そうなの？ じゃあ…… 」

「 多分、そいつは、長谷川 亜稀だ。 」

しかし分かりにくい特徴だつた。髪は肩より長く、色は黒、とか美女とか、守つてあげたいとか、もつと分かりやすい特徴はと言つたら、周りの人達が顔を赤くしていて中には、鼻血を出してる人もいた。で 分かつた、噂では聞いてたけど本当だつたんだ、確かに笑顔を見たら男女問わず大抵の人は鼻血を出すつて……俺、面識ないな。

「 ハルには、嬉しい情報、確か、彼氏はいない。クラスは2-1だつたはず 」

ハルはガツツポーズをしていた。あつちなみに俺3組ね、まゆまゆは、1組。関係ないか……

「 マジで、ありがとう兄貴！ 」

ハルが笑顔でそう言った。やめろよ、そんな笑顔で見られた……

……殴りたくなる。

「兄貴、その振り上げてる拳を下げて、恐いから。」

……「じゅせり、実際に殴ろうとしてたみたいだ。反省だ。それにしても、暇だ

「ハル、暇だから外に行つてくるわ」

ハルにせつ告げた。とりあえず、デパートに行くか。

デパートに着いてみたら、俺と同じ学校の制服の人がナンパにあつていた。

ん？ あれは、さつき話して 長谷川 亜稀ではないですか、噂をすれば何とやらつてか？ あれ？ 何でこっちを見てニヤつと笑つて、こちらに来やがつた。……しまつた！ 今日学校が午前中に終わつたから制服のままで来てんだ！ 絶対に巻き込まれる！！ 逃げなきや、つてもう遅かつた。目の前に長谷川いるし、しかもナンパしてたヤツも付いて來たし、こんなにいらねえおまけ初めてだし。

「遅いよ、ずっと待つっていたんだからね。」

長谷川が彼女みたいに言つてきた。つーか今日初めて話したよね。

「アンタこの娘の何なの？」

ナンパしてたヤツが聞いてきた。 そんなの

「他人」「彼氏」です。」

何か彼されたし、しかもナンパしてたヤツをよく見るとイケメン
だし、イケメンがナンパしてんじゃあねえよー。

「いいか、そのない頭よく使って考えてみろ、俺がこんな美人の
彼女がいるはずないだろーー！」

「お前それって、説得しようとしてるのか？」

若干怒り気味でいるし、何か間違えたか？ 後で長谷川は笑つてい
るし

「だいたい、お前はイケメンのくせに何ナンパしてんだよーーお前の
ぐらいのイケメンなら、ナンパしなくても彼女の1人や2人出来る
だろうが！」

「…………何か、すいませんでした。」

「分かればいいんだよ。お前なら、いい彼女作れる、頑張れよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ナンパしてたヤツは「なくなつた。…………。」

「助けて、ありがとうございます。」

長谷川が笑顔でお礼を言った。…………確かにこの笑顔は凄いな。

「あん？俺ただ巻き込まれただけだし、じゃあな。」

違つ所に行ひとじたが、右腕を掴まれた。

「買い物するため」、元に戻つた。

「いや、せがが「やつなの、じゃあ行つたか」「あ

長谷川にて無理矢理買ひ物に付き合わされる事になつた。

何で

「ねえ、これ何でどうかな?」

只今、長谷川に強引に連れて行かれて洋服屋に居ます。何故に俺に似合つて居るかなどと、聞いてくるんだ?今日初めて話したヤツに、しかも普通、一緒に買い物とかするか?はあ~ まつ暇つぶしにはなるか、

「うわ~超似合つてる」
すんげえ~棒読みで言つてみたくなつたから、言つてみた。どう反応するか楽しみだ。

「でも、いいちも良いな……」

めっけやスルーされたし、意外に悲しいもんだな……ん?待てよ今なら、長谷川は服に夢中だから逃げる」とが「ドコに行くの?」
…出来なかつた。

「よし、やつぱつつかう。」

やつと決まつたか、これで解放される、…………何故?長谷川は会計してレジに行かないで、まだここにいる?そして俺の方に服を差し出しているんだ。

「俺に払えと?」

「普通は、彼氏君が払ってくれるんだよ。」

「驚いた、いつの間に彼氏になつたんだ？俺は、」

「そんなに驚く事かな？」

「ああ、大の大人が眞面目に玉子焼きを『おつじ焼き』って読むぐらいいの驚きだ。」

それぐらいの驚きは、あるだろ？ 何せ今日初めて会話したヤツを彼氏と呼ぶのだから。…何で長谷川は笑つてるんだ？

「あはは、面白いね君！ そう言えれば自己紹介まだだつたね。私は長谷川 亜稀。亜稀って呼んでね。」

笑顔で言われた……その笑顔は反則だな、やつぱり。しかも名前で呼べとか

「分かつた長谷川、俺は、たな「高橋 昌哉でしょ。」…

何で知ってるんだ？ 偽名を使おうとしてたのに被されたし。

「何で知つてんの？」

聞いてみるのが、一番だろ。俺つてそんなに目立つた行動してない

はず

「逆に知らないの方が少ないと思うんだけど……」

案外目立つていたらしい苦笑いしながら答えてきた。

「つーかさあ、悠司に買って貰えればいいじゃん。」

まあ、問題です。なぜ「」で悠司の名前が出て来てのでしょ？

正解は、悠司のハーレムメンバーだったからです。
簡単でしたね。皆さんわかりましたか？

えっ？ 弟と話してる時に特定の彼氏はいない的なこと言つたって
？ まあ～別に間違つてはないし、まだ悠司の彼女つてわけじゃな
いんだし しかも2年生になつてクラスが違くなつてから悠司に会
いに来てないんだよね～ 学校の時は… だけど、それ以外の時に会
つてるかもしれないけどそれは知らん！ あまり興味がないから全然
調べなかつたし、でもチャンスはあると思うんだけどね（笑） 何
となくだけど

それよりもどんな反応するのか、楽しみだな～

「悠司つて？う～ん……あつ～もしかして木村くんの「」と～」

頭を「」と少し傾けて考える様にして、その後に思い出した様に

答えた。

「まさか悠司の名前を忘れているって、しかも予想外の回答をやがった。

「いやいやいや、何で今思い出したみたいに言つてゐの? 貴女が好きだった相手でしょ、しかも疑問係で返すなよ」

「え、だつて、忘れてたんだもん。確かにあの時は好きだつたんだけど……ねえ、

あまりにも鈍感過ぎるから、諦めちゃつた」

“諦めちゃつた”だと めつちや軽いなおい、しかも“”つて何だよ!“”つて!! その前に忘れていたとか、やつぱり忘れてたのかい。そんなに直ぐに忘れるものかねえ……ん? 待てよ、これつて…… 良かつたな、弟よ チャンスがあるかもよ。

「……そつか、確かに悠司は鈍感過ぎるからな。たまにわざとじやないかと思うときもあるからな。」

「わざわざ……」

当初の目的の買い物を忘れて悠司の鈍感さを一人でずっと話し合

ついた
ある

終
わつ

母親つて凄いよね。

ガチャ

「おかえりなさいませ、ご主人様」

金色の髪の色をしたショートヘアの少し幼い顔だちの女の子が扉を開けた瞬間に現れて笑顔で言つてきた。
さて問題です。今俺はドコにいるでしょ？

ヒント

けしてメイドさん達がいる喫茶店には、行つてません。

正解は……

「そんな格好で何やつてるの? 母さん」

家でした。解ったかな?

解つた人には、後でお兄さんが飴玉あげるからねミートソース味だけ。

えつ? そんな味あるのかだつて? あつたんだよ、スーパーで買いた物していたら見つけたんだよ、面白そだから買つてみたんだけど……一回も食べてないだよね、普通に考えたらミートソース味の飴何で食べたくないし、今思うと何で買つたんだろう? まつ、いつか 今度亮輔に食べさせれば、

そうそう話しへ戻すけど、玄関を開けたら自分の母親がメイド服を着て出迎えしてるんだよ、あり得ないだろ普通は……年齢が三十路を過ぎてるオバ桑……「まーくん、ちょっとO・H・A・NA・SHIする? (ニコツ) ……母親が着たつて似合わないはずだろ?」

だけど似合つているんだよね、困ったことに、見た目が若く見えるいや、若く見え過ぎるんだよ。前なんて一緒に(無理やり連れてかれた) 買い物に行つた時、ちゃんとした妹さんだね。って言われたんだけど、あり得ないだろ? 100歩譲つて姉ならまだ分かる。な

のに妹つて何だよー？妹つて！…どんだけわけえンだよー？まあ、それは置いといて

「もつー一度言つたが、そんな格好して向じてるの、母さん」

「ん？この格好？それはねえー、まーくんが着がぶと思つて着てみたのー、似合つてるかな？」

笑顔で話し始めて急に不安そうな顔になり、上目遣いでこっちを見てきた。その姿がとても可愛らしくて……………つてちやんと待て！…何で母親とラブコメ的な展開になつてんだ！？…とりあえず落ち着け俺、こんな時は深呼吸だ。

ヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ

つてこれは違うだろ？……………

「うーー似合つて、ヒクッ……………なかつ……………ヒクッ……………たの？」

田中は涙が一杯溜まつていて今にも溢れだしそうになつていた。

ダア~~~~~黙つて考え事していたら、今にも泣きそうになつてゐるしー

「こ、似合つてゐから、凄く可愛いから」

「ホントに?」

「本当にだからー。」

「ホントにホント?」

「本当に本当にだからー。」

「じゃあ、今日一緒に寝よつね」

「分かったから……ハアー」

何で否定しないの?と思つたと思つたでしょ? 大変何だよ、
否定すれば折角泣き止みそうなのに、今度は完全に泣くんだよ! そ
したらなかなか泣き止まないだよ……ハアー。

話は変わること、いやそんなに変わらないか……どっちでもいいや、俺の母親は、人気アイドルグループが所属している会社の社長で家には、ほとんど帰つてこないだよ。だからつて油断してた。クソッこんなことなら亮輔（変態）の家に泊まれば良かつた。

話がズレだか、そのアイドルグループは、全員が（とはいっても3人だけど）高校生でその内の1人が内の学校にいるらしい。勿論変装は、している。

以上、冒哉でした。

「アリナ、何の件でーさん？ 早く廻へりませ向！」

俺の服の袖をクイクイと引っ張つて目をキラキラさせながら言った。
てきた。

「今、飯食つたばつかりだろ、せめて後1時間位は待てよ。今8時だぞ、そんなに早く寝たいなら、ハルと一緒に寝れば…」

ハルの方をチラッと見た

陽斗は若干泣きそうになつてゐた

……ハル、何と言つがドンマイ、俺もあそこまで嫌がるとは、

思わなかつたわ。

「じゃあ、後2時間は待てよ。」

「……分かつた。…………ん~?あれ?1時間増えてるよ!みつな?」

渋々納得した後に、口元に人差し指を置いて首をコテンと傾けて、考える様にして思い出したみたいに言つてきた。

チツ、気付きやがつたかこつなれば、奥の手

「気のせいだって、あんまつそつまつ事言つと、一緒にねた…」

「タトタとテレビがある方に行つた。

「これだから…

♪♪♪♪♪、♪♪♪♪♪、♪♪♪ ガシッ

田 覚まし時計が鳴り、止め上半身を起こして身体を伸ばした。

「くうう～、あ、～寝みい。」

昨日は、あのあと一緒に寝たのは良かつたんだよ、いや良くなはないけど、まだな、寝るだけなら、布団に入つてから、3時間位仕事の愚痴を言つて満足したのか、俺の右腕を抱き枕にして寝やがつた。そのお陰で、2つの大きな山が、ね？それはまだ、ましなんだよね。毎回やつてくるから、しかし、我ながら変なことに耐久出来ちゃつたな？まついいや、

ふと、時計の方を見ると7時30分だつた。

「久しぶりに弁当でも持つていくかな。」

毎日昼は、学校の購買で買つてるから金かかるし あ、～弁当作るの面倒くせえ、作りせるかな？などを思いながら階段を降りてリビングに向かつた。

ハルがテレビを見ながら、朝食を食べてた。俺が降りてきたのを
気付いてこちらを向いた。

「あつ、兄貴おはよつ。」

「ハル、はじめに禮つとく、ありがとつ。」

「な、何が？」

キヨトンとした顔で聞いてきた。じこは、やはり笑顔で

「弁当作つて」

「嫌だよー！……つて弁当なら、母さんが作つてくれたみたいだよ、俺たちの分。」

「ほり、と言つてキッチンの方を指差しキッチンの方を見ると2つ弁当箱があつた。…………うん。今日は、生徒会の人に分けてもらおう。けして、母さんの料理が下手で壊滅的な味という訳でなく、どちらかといふと普通に面白い分類に入るでも弁当にいりんテコレーションがあるんだよ。といふことで

「いや、やつぱにらないわ、ハルにあげる。お前なら食えるだろ？マザコン。」

「いや、やつぱにこつは無理だよー！」

すぐさま否定してきたしつーかマザコンの部分はスルーかよ

「せつかく、母さんがハル為だけに作つたのに残すのが、あ～あ

わざと為にを強調して言つてみた。ハルはマザコンだから効果は

「俺の為に……」

ハルがぶつぶつ呟いていた。あと一息だな

「悲しむだらうなーもしかしてハルのこととか」「2つ食べると…」「……」

「…ヤリ、予想通り。さすがは、マザコンだな。……はつーーもし
かして彼女が出来ないのつて（……）

つて面倒くせえ、何で朝からハルのこと考えなきゃいけねえんだ。
ふあー 寝みい

そう言えば、母さんはもう家にいなかつた。どうせ今月はもう帰
つて来ないだろ。社長だから忙しいだろ。

キーングーンカーンゴーン

起立、礼。

四時間目の授業が終わり、学級委員の人が号令をかけた。
さて、生徒会室にでも行つて食料調達にでも行くかな？ そう思い席
を立とうとすると、話をかけられた。

「あれ？ 今日は買つてきてないの？」

大地が弁当を持ちながら近付いてきた、爽やかな顔しながら

「死ねばいいのに」

「ちよつ、いきなりひどくない！？」

「あ？声に出てた？わりい、 気にするな本音だから。」

「本音…？本音なのかよ…気にするわ…。」

「全く、弁当を持つて現れたと思ったら、人の席の近くで騒ぐなよ周りに迷惑だろ。」

はあ～これだから、イケメンは困る。

「原因はマサだろ…。」

まだ、騒いでるし、つーか腹へつた早く生徒会室に行つて食料調達しなきやな

「じゃあな、俺は食料調達に行つてくるわ。」

そう大地に言い扉の所まで行き開けようとしたら、自分が開けようとする前に開いた。

ガラガラ

「あつ、畠誠さん。ちゅうじ良かった、これお兄ちゃんに渡してもいいですか？」

扉の向こうには、悠司と同じで少し茶色がかつた髪色で長い髪をサイドテールにしている、美少女が持つていた弁当をこっちに向けている。わかっている通りこの美少女はリア充こと、悠司の妹さんです。この妹さんは、”実は、私たちには血縁関係がない義兄妹なんだよ。”とかを言う程の重度のブラコンだった。つと言つても、兄は兄で重度のシスコンだからな……なぜ、”だった”といつと、最近は、悠司に対して冷たい態度をとつているんだよね～ツンデレか？と思つたけど、違つらいいんだよね、前なんて、悠司が抱きつこうとしたら、”いや、触らないで！！”つてめっちゃ拒絶してたし、それを聞いた悠司は真っ白になつてたけど、あの時の顔は面白かつたなあ～写メ撮つておけば良かつた。

……ん？ちょっと待てよ、もしかして最近のシンデレはシンが10で残りの0がデレなのか…？ な訳ないが、妹さんは1年生でハルと同じクラスらしい

悠司に弁当を渡せとい……！」は、やつぱり美少女の頼みだから……

「だが断る。」

「うそ、やつぱり断るのが一番だな。樂しようつといつ考えが甘いんだよ。社会は、そんなに甘くない」と教えてあげないと特に後輩にはな。

「悠司の妹さんや、それぐらこ自分でやりなきこ。俺はこれから生徒会室から食料調達するといつ大事な任務があるんだ、それに悠司は妹さんが直接渡せば喜ぶだろ~。うわ~ここへりこじ。」

「やつですか…」

少し考えてから

「……それなら、口く食へて下さー。」

と、ひざひざに弁当を渡した。

は
?

面倒くせえー

うん。さっきのは聞き間違えた。そういうつもりでいる。絶対にそうだ。よし、速く生徒会室に行くか。つとその前に

「おーい、悠司いーー妹さんが呼んで……」

「莉緒おーー！！」

さっきまで、窓側に居たのにもう近づいているし、シスコンってスゲエな…つーか最後まで言わせろよ。

悠司が両手を広げて妹さんめがけて突っ込んできた。

「いやー…来ないでー！」

スカッ

妹さんは悠司が走つて自分に向かって来てるのを見て明らかに拒絶反応を見てせた後にそれを避ける様に俺の後ろに隠れた。

ドンッ

悠司は妹さんが避けたことによって勢いよく壁に激突していた。

「昌哉さん。怖いですぅ……」

妹さんはそう言いながら俺の制服の左袖を掴んでいて目には、涙が溜まっていた。…………ちょっと待てよ、こんな所悠司に見られたらヤバくな？悠司の見方によつては、俺が泣かせている見たいに見えるんじやね？普通に見たらありえないけど、悠司の視点なら都合の良いように変わるという意味不明なことが起こるからな、速く逃げなきゃ危ないな

ふと悠司の方を見ると物凄い殺氣を放ちながら相ひちらを見ていた。

「…………ほう、ほう、人の妹に手を出した挙げ句泣かせるとほ……覚悟は出来るんだろうな。」

…………ほらな、どうから見たら俺が泣かせている様に見えるんだよー明らかに助けを求めているだろうが！ーこれからシスコンはいや待てよ

「悠司、お前の為に妹さんがわざわざ弁当持つてきてくれたらしいや」

わざと”為に”を強調して言つと殺氣が無くなつた。後は妹さんが悠司に弁当を渡せば完璧だな。妹さんを悠司の前に立たせた。もちろん、妹さんに触れた訳だが、その時に殺氣が放つっていたが、気にしないでおく。

「本当かい？莉緒？」

悠司が笑顔で妹さんに聞いていた。

「これは、お兄ちゃんにじやあなくて、畠山さんの為に持つてきたのー！」

「…………は？…………何言つているんですかあなたは？最初に悠司に渡せと言つていたでしょ？が！？んなこと言つたり、さつきよりも凄いことになるだろ！」

「…………ほう。つまり、莉緒は俺に渡すハズの弁当を貴様に齎されて渡せなかつたから、泣いていたのか。…………やはり、貴様は殺さないといけないみたいだな」

やつれの余話でどんな解釈したり、やつなるんだよー？

やはつれよりも一段凄い殺氣を放ちながら殴ってきたが殴つて来るのは、予想出来たので避けることが出来た。

危ねえ、こんなとこだったら、命がいへりあつても足りない、こ
うこつ時は逃げるが一番！

そう思い走つて逃げるが案の定、悠司が追つてきた。

「待てやー、ゴリラーー！！」

あ、~~~~~シスコンは面倒くせえ~~~~~

面倒くせえ～（後書き）

気が付けば、お気に入りが10人以上になりました。

目標にしていた10人が達成することができました。

皆様、本当にありがとうございます。

これからも、よろしくお願いします

油断したな！

ふう〜何とか逃げれたか？

しかし、普段は誰にでも優しいのに妹絡みになると性格180度変わるとかあり得ねえ、もし妹さんが彼氏とか出来たりしたらソイツを半殺しにしたりして（笑）そんな訳ないか

やべえ、想像出来ちゃったし、『莉緒と付き合うならまず、俺を倒してからだ！クラアアアアーー！』とか言って突っ込んで行く姿が簡単に想像出来る。まあ、そういう台詞を言つのは、大抵カウンターを食らつて、一発ＫＯなどで終わりというのがお決まりだけど、ね悠司なら……まつ、いいかそんなこと、それよりマジで腹が減つたな。速く食料調達しなきやな。

「ねえ、開けてくれない？入れないんだけど」

今は、生徒会室の前に来ているんだけど、中から鍵をかけられて入ることが出来ない何故かといふと…

「うるせえ！！」は、生徒会役員以外は立ち入り禁止だ！！況して貴様なら尚更だ！」

そう、このお兄さんが開けてくれないんだよね、このお兄さんの名前は、東 京太郎。同じ2年生だ。

「腹へつたから、なんか頂戴 」

「何故、俺が貴様に食料を与えなければならぬ、仮に食料があつても貴様には、絶対にやらん！」

「なら、中に入れて、他の人に頼むから。」

「駄目だ」

中には入れてもうえないようだ。

仕方ない、強引に行くしかないな。

ポケットから、手紙を取り出した。

「なあ、ちょっと聞いてくれかい？ これは、とある中学生が好きな人に書いた手紙なんだ。【君のことを…】」

バンッ

手紙を読みだすと、勢いよく扉が開きた

「え、貴様！ そ、それをどー！」

「わあ～ね、」

鬼の形相で睨んできたが、サラッと流した。

「わ～てど、取り引きでも、しようか? ポレを渡して欲しいなら
……解る、な?」

「くつ、…生憎だが、弁当ならもうない! 残念だつたな」

「なら仕方ないな、俺も鬼では、ないからな。」

そう言つと、手紙をヒラヒラ揺らしながら

「これを校内放送で流すしかないじゃないか。」

「貴様は、鬼か!?」

「ひどい」と呟つながらネットに載せる所を、校内放送までに下げるの
に…

「あまり、

ウチの役員を苛めないでくれるかな？」

生徒会室から、黒髪でショートヘアのスタイルが良い、美人の女性が現れた。

「やだな～～これは、苛めてるんではなくて交渉をしてるんですよ。結城先輩。」

この人は、結城 夏希。3年生で、生徒会副会長。とは、言つても生徒会の実権はこの人が握つてる。

「フハハハハハ、油断したな！」

結城先輩と話していたら、手に持っていた手紙が奪われていて、それを持ち高笑いしながら、走つて行く京太郎の姿があつた。まついいか、家に帰れば「コピーがあるし、

「とこつ訳でください。」

「どうこつ訳か分からぬけど、主語がないわよ。何となく分か
るけど、ついてきて。」

結城先輩の後に続いて生徒会室に入った。

油断したなー！（後書き）

皆さん、ヤンデレって好きですか？

シスコンは一人でいい！

生徒会室に入り、机が向かい合わせに3列あり、いかにも生徒会室つて感じに並んでいた。そして何故かソファーがあり、ここに何時も座っている会長がいなかつた。

「そう言えば、会長いませんね？」

結城先輩は振り向いた。

「そうなのよ！遙香つたら、仕事あるのに何時も抜け出したり、来なかつたりするのよ！信じられないでしょ！？会長なのに！？確かに居ても邪魔だけどね、でもそれとこれは、違うと思わない？違うと思うでしょ！？この前なんて……」

会長が見当たらぬから聞いて見たら、凄いことになつた。

……大分ストレスが溜まつてゐるんだな、結城先輩でも流石に。でも会長は、全生徒から絶大な人氣があるからな、特に男子からが半端ない人氣があるし、集会の会長の挨拶なんて、アイドルのコンサート並みに凄いからな。それに加えて、スタイルが抜群、ルックスも……うん、言わなくて分かるな？そんな人を解任なんてしたら

大変なことになるから出来ない。見てみたいけど、そんなこんなで全部結城先輩の所に皺寄せがくるという事になるため生徒会の権限は、殆ど結城先輩が握ってる事になつてゐる。その結城先輩は何故だか女子生徒からの人気が半端ない”お姉様”の愛称で何回も告白を受けている。

気付けば、結城先輩の愚痴が終わっていた。

「「めんね、愚痴を聞かせちゃつて」

申し訳なさそうに謝つてきた

「いえ、気にしないでください。それよりも、」

正直全然聞いてなかつたから、全く知らんじ

「あつ！ そうだったね、忘れてたよ。おにぎりでいいかな？ それしか残つてないんだよね。」

「なんでもいいです、食えるなら」

「ひょっと待ってね、持つてくるから

そう言つと結城先輩は奥の部屋に入つていった。

「あ、あのーこれよかつたら、食べますか?」

アホ毛がピラリと生えている橙色した髪の女子生徒がサンドイツチを差ししてくれた。

「あっ、くれるの?」

受け取らうとしたら物凄い速さで、何者かに取られた。

「お前が、友香の作った料理を食べるなんて100万年はやいんだよ!」「

わっせはは、と言しながら奪い取ったサンドイッチを食べた。

「お兄…、すいません、先輩。」

それを見た友香は、自分の兄に対して怒り、直ぐに冒哉に謝った。

「何を謝つてんだ友香？」のウジ虫に対して謝る必要なんてぞ、
アイツが友香の作ったサンドイッチを食おうとしたのがいけねんだ
よ」

兄は自分の妹が謝つているのを見て自分の考えを言つていた

忘れてた、ここにもシスコンがいるんだった。それにしてもウジ
虫つて、ひでえな（笑）

「お兄がいけないんでしょう…、先輩にあげようとしたサンドイッチを食べるから…。」

「どうしたんだよ友香？もしかしてウジ虫になんか弱みを握られているのか？それなら大丈夫だ、お兄ちゃんが居るから指一本触れさせねから、安心しろ。」

「……」では、俺が弱みを握つてゐ事になつてゐし、確かに持つてはいるけどね

「そんな事…………なによ……うふ。ないと細つて、そんな事は……」

「うん、物凄く悩んでたね。残念ながらあるんだな、これが、ドンドンマイ！」

「じゃあ何でだ？世は、よく、お兄ちゃんお兄ちゃんと黙つて後をついてきたのに、風呂だつて”お兄ちゃんと一緒にさあ入らない”と言つてたじやないか！？」

「何時の話をしているの？今はそんなこと関係ないでしょー！それ

にそんなこと言つた覚えないよ！？いつも私が遊んでいたら、お兄
が突然やつてくるんでしょ、お風呂の時だつて、お兄が勝手に入つ
て来たんでしょう！？私は、お兄の事を”お兄ちゃん”なんて呼んだ
ことないもん！…」

これはシスコンじゃなくてストーカー？しかも自分の願望が入つ
ているし、さすがシスコン先輩！憧れる。”お兄ちゃん”って言わ
せるなんて

「……………そ、うか、照れ隠しなんだなー甘えたいけど恥ずかしんだ
なーよし、分かった。」

一歩、一歩、兄は妹に近付いた。

どんな解釈したの？せつかく”お兄ちゃん”って言われたのに、氣
付いてないし

「えつ、ちよつ

近付いてくる兄に気付いて、逆に一歩、一歩、後ろに下がつて行

つたが、壁があり、これ以上下がれなくなつた。

「せ、先輩！ヘルプです。助けてくださいー。」

これは、どうするか？

1、助けてを呼ぶ

2、助けてる

1を選んだ場合、自分が労働しなくて手っ取り早くその場を鎮めることが出来る。

2を選んだ場合、物凄く大変だが、後輩の好感度つなぎ登りに上がる。

ここは

やはり

「『めん、俺、英語わからないや。』

当たり前だよね、俺日本人だし英語で言われても

「何ですか！？ 私ちゃんと日本語も言いましたよね！？」

そんな事を言つて、いふうちにシスコン先輩は、目の前に来ていて、手を伸ばした瞬間に

ゴンツ

国語辞書を持った結城先輩がいた。

「普段は優秀なのに友香ひやんの事になると……全く」

シスコン先輩は、床に伸びていた。

「…………哉くんも哉くんよ、何で止めないのよ。」

ハアとため息混じりに

「無理言わないでくださいよ、止められる訳ないじゃあないですか、逆に俺が何か言つたら、余計悪化しそうだし」

「それもそうね。

「はい、これ。中身は鮭だけど大丈夫よね？」

「ありがとうございます。」

「いいのよ、生徒会の仕事手伝つてもらつから」

「何!? そんな事があるなんて!
な、なんてね、どうせアレだろ?
つーか、伸びてるシスコン先輩を結城先輩がずっと踏んでるんですけど、

「わかりました。放課後悠司連れて来ますよ。」

「さつすが! わかつてるね~」

「俺と結城先輩の仲じやないですか。」

アハハハと二人で、笑いあつていたら

「先輩と結城先輩ってそんなに親しい関係何ですか？」

と友香が聞いてきた。

「「全つ然！」」

二人で、ハモリながら否定した。

てか、知り合ってから、一年も経つてねーし

システムは一人でいい！（後書き）

最近、ヤンデレが好きになってしまった……

皆さん、クーデレってなんの略ですか？

教えてください。

そもそもこんなものないの？

学校の廊下を歩いていると、窓ガラスから太陽の光を浴びた。空を見ると雲一つないキレイな青空が広がっていた。

こんな気持ちいい天気を見て思う……

「世界、滅びねえかな？」

「何、恐ろしい事言つてんだよ！？」

昌哉の言葉に大地がツツコミをいれた

「何だよ……人が気持ちよく空を見ていたのに」

ハア、全く と続けて肩をくすめた。

みんなだつて思うだろ？世界が終わる日が、天候が最悪で大雨が降つてじめじめした日より、天気のいい日が良いだろ？どうせなら

ギンギンに晴れた日に最後を終えたいじゃん。気持ち的にも

「アレ?俺が悪いの?」

大地は、困惑していた。

「で?何か用なんだろ?」

「そうだ、次の時間体育じゃん、だから知りせよつと思つてな。」

速くしないと教室入れないと。と続けた。

そりなんだよな、体育だから着替えないとならんし、普通は、男子が教室で着替えるだろ?多分。

でも、この学校は逆で”今年から”男子が更衣室で着替えるという風になつて。しかも更衣室は、1クラスの男子が入らないくらい小さめ、2回にわけて着替えないと駄目だ。学校の男子と女子の割合は、7:3で明らかに男子の方が人数が多い。

以上の点から、速く着替えないと面倒い

「なら、俺の分の体操着を持ってきたまえ。どうだ嬉しいだろ?」

「何故に命令形? つーか嬉しくないわー!」

持つてきただけどさ、と続けて、体操着を冒哉に渡した。

流石、陸上部のACEだな。『豪美として、また女子達に追わせてやるか。

ブルッ

大地が突然震えだした。

「どうした? どうなに震えて」

「いや、何か誰かが恐ろしい事を考えてる様な気がして」

「……気のせいだろ」

凄いトラウマなんだな。考えただけで、震えだすなんてな、まつ止めないけど。あは

「最初の間は何だよ。」

「そんな事より、速く着替えに行くぞ」

「ん? もしかして、マサか! ?

「……何の事だ?」

「やつてえ、”女子達に追わせてやる”とか思つたろーー？」

チツ、はぐらかせたと思ったのに

「何だ？自分から言つていい事は、またやつて欲しいのか？俺は一向にかまわないけど」

「疑つてすみませんでした！」

キレイな土下座で謝つてきた。

俺は疑つからだよ。思つてたけど

「速く着替えに行かないと、混むぞ」

更衣室に向かつた

校庭には、体操着に着替えた男子達が出血しながら倒れている姿があつた。

「スゲエ、
マジでこんなこと起こるんだ。」

7:3 (後書き)

今年最後の投稿だと思います。

体育の先生が戻ってきて、目の前に拡がる光景に驚愕をした。

「な、何が、…何が起こったんだあーーー！」

先生は、天に向かつて叫んだ。前方には、四人の男が立っていた。一人は、あたふたしていた。一人は、笑っていた。二人は、言い争いをしていた。その近くには、出血をしながら倒れている、男子生徒の姿が大量にあった。

これが、後に『吉田の悲劇』と言われる事件の始まり……嘘だけどね。

何でこんな状況になつたのか、さかのぼる事、数分前

「よーし、みんな揃つたな？今日は、いい天気だしサッカーでもするか。」

体操着に着替えて、校庭に集まつた後に各自で準備体操をした後に先生が来て、今日行う種目を発表した。女子と合同ではなく、男子が校庭の時は、女子は体育館という風になつていて、もちろんあちらの先生は女性で、こちらは、暑苦しいマッチョのゴリ先生。35歳、独身。

今日は、じゃあないだろ、いつもサッカーじゃん。

『え~~~~、何時もサッカーやつてんじやん』

クラスの全員がサッカーをする事に反対した。しかし、それだけでは終わらず、『芸がないんだよ。たまには違うことをやりたい!』までは、不満だけ良かつたのだが『だから、結婚出来ないんだよ。』

『どーせ、デートの時も同じ所しか行かないんだろ』『いや、彼女なんて出来ないって、あんな顔で!アハハハ』などと何故か私生活の事まで文句を言われて、ゴリ先生は、落ち込みその場に体育座りして、の の字を書いていた。

さすがに言い過ぎだつて(笑)それに、彼女ならいたらしいし、それにしても、体育座りしながら”の”の字を書くつて以外にムズくね?

「みんな、先生が可哀想だろ!—!」

悠司が立ち上がり、みんなに注意をした。それと同時にゴリ先生が少し元気を出しだが

「じくら、ゴリラに顔が似ているからってそれは、言い過ぎだつて!—!」

次の瞬間、更に落ち込んだ。それを見た悠司は、困惑っていた。

あ～あ、悠司が一番酷くない？みんなそこは隠していたのに、本人の目の前ではっきり言つたし、仕方ないにこには俺が…

「悠司、お前は座つてろ後は、任せろ」

悠司に一聲かけて、ゴロ先生の肩をトントンと軽く叩いた。

「先生、どんなに筋肉の鎧を纏つても、自分の弱さ、弱點は隠せませんよ。」

「うわわわわん。そんなこと分かつてんだよー。」

それを聞いた途端泣きながら、走り去っていた。

30歳過ぎのおっちゃんが”うわわわわん”だつてよ（笑）

『いや、何でアメ刺してんだよー…』

クラス全員が息のあつたシッコリをした。

「……………」

「……………とあえず、何をするへゴリ先生がいなくなつたから、一
応何でも出来るナビ」

大地がみんなに何をするかを聞いていた。

「サッカーでいいんじゃない？」

「やることないし」

「今から準備する面倒いし」

最終的にサッカーをする事になった。

なら、最初つから文句言わずにやれば良かったんじゃない？

バシュ

ゴール

「大地スゲエな、ハットトリックかよ」

その後、半分に別れてチームを作り試合をしていた。相手チームには、大地がいてハットトリックの活躍で、0対4で負けている。こちらのチームは、悠司や亮輔（変態）がいる。普通に考えれば、こんなに差がひらく試合には、ならないはずだが、悠司は、サッカーが余り得意ではないので苦戦をしている。

「残り時間、後7分な！」

「おい、マサもちゃんと動けよ！」

悠司が、余り動かない昌哉に対して怒り気味に文句を言った。

え～面倒、…………そつだ！

「悠司こそ、大地に負けてんじやん」

「……仕方ないだろ、余りサッカー得意じゃないんだよ。」

「あ～あ、悠司なら、負けないとthoughtたのにな。」

わざとひっしゃまつた後にチラッと校舎のまつを見た。

(頼む、見ていてくれー)

ビンゴー。

これで楽して勝てる。

「あそこで、見てる妹さんもがっかりするだろ? うな。」

校舎のまつを指差したといひ、ちよつといふ窓から「チラリ」を見てい
る悠司の妹さんの莉緒がいた。
それを見た悠司が少し動搖した。

「ヤッ、あと少し

「せつかく、妹さんが見ているのに負けている姿を見せるのか？ショックだうな、兄のカッコいい姿を見る筈が、負けている惨めな姿を見る事になるなんてな、ああ、もしかしたら、き……」

「誰が負けるひて？やつてやるよー。」

悠司は、ボールがある方に走つて行つて、すぐさまボールを奪いゴールを決めた。

スゲエ、実際に人」とゴールネットにいれる事出来るんだ。もう一人ぐらい必要かな？

亮輔がいる方に向かつた。

「なあ？悠司より、点数取つてみない？」

「やだよ、面倒い。自分でやれよ。」

亮輔は、素早く断つた。

「実はな、最近面白い情報を聞いたんだよ。」

「ふーん、どんなの？」

亮輔は、話題に興味をもって、続きを聞いた。

「悠司が持つてる、H日本の隠している場所が分かつたんだよ。
亮輔が悠司より、点数を取つたら教えてやるよ。」

普通の人は、こんな話しのる筈がないが…

「よつしゅあああーー任かせろ」

亮輔もボールがある方に向かって行った。

完璧だ。流石俺！

試合が終わり、7対5で昌哉がいるチームが勝つたが…

「俺の方が点数が多い筈だ！」

と悠司

「ぜつてえ俺だ！」

と亮輔

この一人が決めた点数は3点と同じなのだが、自分の方が多いとどちらも譲らない。悠司は、自分が一番活躍したのを、妹の莉緒に見せるためにと譲らず、亮輔は、悠司が持つてる工口本のため譲らないということになつていて。ちなみに、一番点数を決めたのは、大地である。一人は知らないが

悠司は妹さんのため、亮輔はどうせ工口本を入手してそれを妹さんや自称西山さん達に見せて、好感度を下げてその後に自分の物にするためだろ？まさか、ここで問題があるなんて！？（笑）

「止めなくて大丈夫かよ、マサがやつたんだろ？」

大地が言い争っている二人を見て声をかけてきた

「大丈夫だろ、それに今止めに入つたら大変なことになるぞ」

勇気のあるクラスメートAが止めに入つた。

「ちょっと、落ちつけって二人とも」

止めようと一人の肩に触れた瞬間

「邪魔」

「うるせええ」

悠司が裏拳、亮輔がボディーブローを放つて、クラスメートAは、鼻血を出しながら倒れた。

「田中あああ！！」

「いや、誰だよ。」

大地がツツコミをいれてきた。
そこはノリだよ。

俺と大地を除くクラス全員がそれを見てあわてて悠司と亮輔を止めに入つたが次々と倒されていった。

「え、 ビーすんだよ、 これ」

で、 今にいたる。

「リ先生が、 悠司と亮輔に説教している。

「おい、 戻るぞ」

大地に声をかけてた。ゴリ先生の説教長げえからな、つーか保健室連れて行かなくていいのかよ。

「いいのかよ、黙つて戻つでも？」

「もう、時間だしそれに長いだらあれば。」

「……確かにな」

確かに（後書き）

頑張りました。もう無理だと思いますが、今年中にもう一回

中止せ.....(複数形)

ちょっと、変えてみました。

中身は……

世の中は、わからない事だらけだ。人が知っている事なんて少し
しかない。それでも人は情報を欲しがる。例えば好きな人の趣味な
どの情報を持つていれば、その分好意を持たれるかもしれないし、
そうじやないかもしけない。それでも人は情報を欲しがつてしまふ
好奇心故に……

昌哉「 そう思わないか、大地？」

大地「 … そんなことより、アノ話本当なのかよ！」

そんなことって酷い！まだ何も言つてないし！つーか質問を質問
で返すなし！

畠哉「違うに決まつてんだろ」

何の話か分からぬがとりあえず、否定してするのが一番。

大地「だよな、カツアゲをしようと来たヤンキーを逆にカツアゲしたつて話さすがに嘘だよな。」

安堵の表情をして、息を吐いた。

ん? 今なんつった?

畠哉「その話誰から聞いた?」

大地「ん～…確かに、ま……相澤からだつたような……そうだ
！ウチのクラスって何て呼ばれているか知つてか？」

自分からふつといて、いきなり話題を変えるか普通、まゆまゆを
名前で呼ばうとしていた事はスルーしてあげよう今は、何て優しい
んだろう俺

昌哉「知らん、何て？」

大地「樂園つて言われて いるらしい。なんでも、このクラスには
美男美女が他のクラスに比べて格段に多いかららしい。」

多い、ねえ……

昌哉「確かに、な」

周りを見ると確かに多い。

ふと、昌哉はある人物の方を見た。

昌哉「ウチのクラスには、アイドルも居るしな！」

大地「アイドルウ！？……ああ、木村の事か。」

大地は驚いて、聞き返したが納得したように、悠司の苗字をだしだ。

違うんだけどな、このクラスに本物のアイドルが居るのに誰も気付かない。まつ仕方ないか、あんな変装してるし逆に気付つ方がどうかしている。

昌哉が見ていた人物は、ボサボサの髪型で目元まで髪の毛が伸びていて、センスのないメガネをしていた。

大地「それでな、さっきの続きをなんだけど、1組は血の館なつたて」

昌哉「うん、理由が一瞬で分かったわ」

絶対にアイツだ。アイツしかあり得ない。よし、昼休みになつたら、1組に行くしかないな。まゆまゆの事もあるし

昌哉「よしーなら昼休み、1組に逝くぞ。」

大地「何がよしだよ！話聞いてかよ、血の館つて呼ばれているんだぞ！？何か危険な感じするだろ！そんなクラスにわざわざ行く必要ないだろ！」

大地はものすごい勢いで拒んできた。

さては、「トイツ理由知らないな。確かに名前だけ聞けば物騒だけだ、

昌哉「それなら、5組にするか？」

大地「すみませんでした！…1組でいいです！いや、1組に行かせて下さい！…」

さつきより、速く謝り土下座をしていた。

何故土下座かというと5組には、恐そのお兄さん達、いわばヤンキー達がたくさんいるのが原因で他のクラス人たちには、怖がられているからだ。

昌哉「そこまで言うなら、1組に逝くか。しかし何でそんなに嫌がる？面白い奴らだぞ」

大地「そんなこと言えるのは、マサだけだって…しかも行くの字が違うし。」

大地は苦笑いしながら言つた後にちやんとシシ「ノミもいた。

そりか？面白い奴らと思うんだけどな、この前なんておにぎりの中身は、梅干しか、昆布かで口論していたと思つたらいつの間にか喧嘩してたし最終的に中身は鮭といつ事で意氣投合してたし、最終的には、違う食材かい！ ってシシ「ノミたくなつたが我慢した。

だつて……

中身は、明太子って決まってんだからーー！
俺はあまり好きじゃないけどな！

なら言つなつて？そこは…ノリだよ。

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

遅いと 思いますが.....。

少し 变えて みましたが、どちらが 良いですか？

イジメでしょ!!

昼休みになり、大地と一緒に1組の前まできた。

ガラガラガラ

教室の扉を開けて入ろうとしたら

「は、長谷川さんー！」、『これ！先生に頼まれたプリントです！』

勇気ある1人の男子が長谷川嬢にプリントを渡していく

「ありがとう」

それに対して長谷川嬢は、笑顔でお礼の言葉を言った。そう、笑

顔で

「ぐはっ」

『田中あーー!』

笑顔でお礼を言われた田中さん?が口から吐血し倒れて、周りにいた人たち（男子）が慌てて近くに来た。

「か……彼女……の……笑顔……は……天使……の様……だ。」

そう言ひびガクッと力尽きた様に倒れた。

『田中あああああああああああああーー!』

「ちいーす。」

「いや、普通このタイミングで入るか？」

何を言つたか、ベストタイミングじゃないか、絶叫が終わった後に軽い感じに入る。完璧ではないか

「あつ、彼氏くんではありませんか？何？もしかして私に会いに来てくれたのかな？嬉しいなあ～」

長谷川嬢がこちらに気づいて声をかけてきた。

「びっくりしたあーまだその設定が続いてたんだ。今日は違う用事でね。」

「なんだ、会いに来てくれたんじゃないんだ。つまんない」

言葉だけ聞けば、いじけているまたは、落ち込んでいる様に見える……顔がニヤけていなければ

「せめて、笑つの我慢しろよ。」

そう言しながら、長谷川嬢の席のといひまで歩きながら近付いた。

「隣にいる人は？」

「もう言えども、まだ紹介してなかつたな。コイツは……」

「オレ、藤森 大地。よろしくな！」

俺が大地を紹介しようとしたら、遮る様に自分で名前を笑顔で言った。

チツ、遮るなら最初っから自分で言えよ。イケメンのクセに

「私は、長谷川 亜稀。じちゅうじよろしくね。」

長谷川嬢も笑顔で返した。

「大地、大丈夫か？」

「何が？」

そこには、笑顔で鼻血を出している大地の姿があつて、自分はまだ気づいていない。

笑顔で鼻血を出してるイケメンとかキモッ！

『あやああああーー！』

クラスにいた女子たちから黄色い悲鳴があがつてこちらに向かつてきた。

あれ？もしかして俺、間違つてた？それにしても、この人たちどうすつかな。

「イケメンガードオーー！」

横にいた大地をとつさに前に出した。

「えつ？ちよつ、やめ…」

とつその事に大地は何も出来ずに女子たちにもみくぢゅにされて連れて行かれた。俺はそれに対し敬礼をした。何故か長谷川嬢も

ざまあ。

「座じへーイヤつこてるや?」

危ない、危ない。

「それで何の用事で来たの?」

長谷川嬢が目的を聞いてきた。

「やうやく、まゆまゆいる?..」

「そこだよ。」

俺の問いに長谷川嬢は指差して答えた。そこには、毎晩中のまゆまゆがいた。

「ヤツ

まゆまゆの席に近付いて、前の席の人の椅子に向かい合わせになるように座った。

「てい

バチン

「イタツ、

寝てこのまままで渾身のトコロをかまして、おいた。

「おせよー」リカエます。

「あれ? 何で私の部屋に皿戻がいるの?」リカエド首を終めていたの

まだ寝ぼけてこののか変な事を囁つてゐる。

「これから教室はまゆまゆの部屋になつた？それにしても、なんつ
つ夢を見るんだよ！？俺殺されそうになつてるし、いや、ここ
は女の子の夢にでてきた」とを喜ぶべきか？

「てー」

バチン！

「イタツ、あれ？」

「もう一発いきますか？」

「だ、大丈夫！もう起きたから。」

指を前に出したら、ビクッと反応した後に手で額を押さえながら

断つた。

寝ぼけているも、痛みは分かつてたんだ。

「おはよー」せえます。

「お、おは……よ?」

まだ痛いのか、未だ押さえなが挨拶をしていた。疑問系だが

さて本題に入るか

「好きな食べ物は?」

「いきなり何なの?お見合いみたいな質問して、……まあ、カツ丼だけど」

困惑しながらも質問に答えていた。

「男っぽいですね。」

「な！？別にいいじゃん！美味しいから」

確かに旨いけどね

「今、好きな人はいますか？」

「何なの？この質問！……いないわよ。」

恥ずかしいのか、小さな声で答えた。

「ブー、残念。正解は隣町の学校の男子生徒でした。」

あの時、俺と一緒に帰ろうとか言っていたのは、一人で見に行くのが恥ずかしいから俺を使つたって訳。

バンツ

「私、答えたよね！これじゃ答えた意味ないじゃん！！イジメなの！」

机を叩いて立ち上がり、怒っていた。

「そんなに怒るなよ、気になっていた彼に彼女がいたからって。」

「これもう、イジメだよね！イジメでしょーー！」

崩れ倒れる様に椅子に座り頭押さえながら、”最悪だわ”と黙つていた。

「なんかな、大地がな俺がヤンキーをなんぢやらとか言つていた訳よ、どこで知つたかわからんがこれ以上、人に言つたら……」

コクコクと首を縦に降つていた。

さて、用も済んだし帰るか？

「大地、帰るぞ」

「藤森くんならさつき連れて行かれてから、まだ帰つて来てないよ。」

周り見たが大地が居なく、長谷川嬢が答えた。

そうだった……これだからイケメンは……はあ～

イジメでしょうーー（後書き）

次はいつ投稿出来るか
…

今月、あと一回は
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1650s/>

脇役主人公から見た彼ら

2012年1月10日23時48分発行